

仙人通信 113 篠井山(1394m)

篠井山(しのいさん)は、山梨県の南に位置する南部町の町役場の裏手に聳える山梨 100 名山(三角点)の山である。国道 52 号線の西行公園の下の洞の先の福土川に沿って、奥山温泉の先にある登山口からのピストンである。

1 月に入って降った雪で道路を心配したが奥山温泉・旅行村・篠井山登山口までは、入れると言う。篠井山登山口(大洞観察棟)には 15 台以上の駐車スペースが在るも、小生の車だけである。登山口から 10 c m 程の雪が登山道を覆う。スパッツと 8 本爪のアイゼンを付けて、大洞沢に沿った林道からのスタートだ。処で『洞』とは、大きな石や崖に挟まれた谷と広辞園にあることから、期待してのスタートだ。因みにこの沢は、川合野累層と言ひ、主に礫岩で凝灰角礫岩・安山岩・閃緑岩・チャートから構成されるらしい。アイゼンのグリップの感触と、瀬音を聞きながら一歩ずつ進む。林道の両側では、白い綿毛の蕾を付けたミツマタが春を待つ。15 分程で林道が終わり登山道のスタートだ。沢沿いの登山道は雪に付けられた 2 人程の足跡に、最近降った雪が覆う。やがて雪に覆われた 50 c m 幅の橋を渡り、左側の沢沿いの道となる。沢の石には雪が覆われ、先に融けた雪解け水が氷結して、見事な氷の造形を醸し出す。何度か丸太の橋を渡り沢の右側となり進む。15 分ほど進んだらうか『明源の滝』である。高さは 10m 程で岩肌を舐めるように水が落ちる。見ごたえのある滝である。杉林の九十九折りの道を高度を上げながら、沢沿いに進む。沢には大小の滝が連つらなり、岩肌を舐める。水の勢いの性か岩は、角が取れた丸い石が多い。30 分ほど進むと渡り場の頭の丸太橋となり、今度は檜林を進む。若干視界が開け、青笹山から高ドッキョウが右奥に望めた。登山道の横の露岩は砂岩質の丸い石となり、風化して表面から剥け落ちた、丹沢の鐘が岳で紹介した『オニオンストラクチャー』である。親しみをもち触れて診た。ポロポロと欠け落ちる状態である。この辺から篠井山を構成する相又累層のようで火成岩の石砕岩のようだ。紹介が遅れただが、山頂から登山口までの距離(3.4 k m)が 10 c m x 20 c m 程の板に 100m 間隔で書き込まれており、自分の位置が掴みやすい。コースは沢沿いの道となり、渡り場から 7 0 分ほど進んだ点に『山頂まで 15 分』の表示である。檜林から、ブナ・ヒメシヤラ・シラビソ・アセビ等に替る。梢越ではあるが視界もやや開け背中に嘗て登った十枚山が谷越しに臨める。雪は 30 c m 程の深さとなり、風で吹き飛ばされた後には透明に光るアイスバーンが顔を見せる。青空には甲斐駒・北岳・間の岳・塩見が青空にくっきりと白い山波を見せる。やがて目の前のアセビの間から、青空と富士山だ。2 時間 25 分で山頂(南峰)である。山頂にある鐘を敲いて『ヤッター』だ。富士山の右には、愛鷹の峰と伊豆の嶺が連なり、左側には、三つ峠から御坂の山だ。ご存じと思うが、ホッサマグナの西側の境界(糸魚川 静岡構造線)がこの篠井山と十枚山の間を抜けて興津川に沿って太平洋に繋がる。そんな地形を確かめるのも楽しい。

北の峰に古今集の選者として有名な『大凡河内躬恒』を祭神とする従四位(しのい)の祠が 3 基あるので、見たいと思ったが、雪で覆われたキレットで転落死でもしたら笑いの種しかないかと諦めた。足元を確かめながらの 5 時間(16000 歩)のゆっくりした山旅を楽しみました。(h 2 5 . 1 . 2 9)

富士山頂



間の岳から甲斐駒



氷の造形

